

2025年度

修士学位請求論文要旨

オンライン観光の発展可能性に関する研究

国際日本学研究科 国際日本学専攻

日本社会・産業システム研究領域

4911242002

須田 陽花理

I 研究背景と目的

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的流行は、人々の移動を大きく制限し、観光産業に深刻な影響を及ぼした。国境を越える移動や国内旅行が制限される中で、観光は現地への移動を前提とする行為であるという従来の前提そのものが問い直されることとなった。このような状況下で登場し、急速に普及したのが、情報通信技術を活用して遠隔地から観光体験を提供する「オンライン観光」である。オンライン観光は、外出や移動が困難な状況においても観光体験を可能にする手段として注目を集め、多くの旅行会社や自治体、文化施設によって実践された。

しかし一方で、オンライン観光は従来の観光体験の代替に過ぎない、一過性のサービスであるという見方も根強い。コロナ禍の収束とともにリアル観光が回復する現在、オンライン観光は果たして持続的に発展しうるのか、という問いが改めて浮上している。本研究は、この問いに対し、オンライン観光がどのような価値を基盤として成立してきたのかを明らかにし、その発展可能性を検討することを目的とする。

II 研究の課題

既存のオンライン観光に関する議論では、利用者満足度や技術的課題、あるいはコロナ禍における代替的役割に焦点が当てられることが多く、オンライン観光がどのような「価値」を基準として設計・提供されているのかについての検討は十分とはいえない。とりわけ、オンライン観光がオフライン観光の補完にとどまりやすい背景や、オンラインならではの独自の価値がどのように形成されているのかについては、体系的な分析が不足している。

そこで本研究では、オンライン観光を単なる代替手段としてではなく、独自の観光体験を生み出している存在として捉え直し、その価値構造に着目する。具体的には、補完的価値と独自の価値という二つの視点から、実際のオンラインツアー事例を分析し、オンライン観光の可能性と限界を検討する。

III 分析枠組み

本研究では、オンライン観光の発展可能性を検討するにあたり、技術的進歩や市場規模の拡大といった外形的要因ではなく、オンライン観光が利用者に対してどのような「価値」を提供しているのかという点に着目して分析を行った。オンライン観光が今後も持続的に存在意義を有しうるかどうかは、単にリアル観光の代替手段として機能するか否かではなく、オンラインという条件下において、利用者にとって意味のある体験価値を創出できているかに左右されると考えられるからである。

本研究において用いる「価値」とは、経済的価値や機能的価値に限定されるものではない。先行研究では、価値は使用価値、機能価値、象徴価値、社会的価値、情緒的価値、教育的価値など、利用者の主観的経験や意味づけを含む多面的な概念として整理されてきた。本研究ではこれらの議論を踏まえ、オンライン観光における価値を「参加者がオンライン観光を通

じて享受する主観的な満足、学び、感情的充足、ならびに社会的・文化的意義の総体」と定義し、分析の軸とした。

さらに本研究では、オンライン観光の価値を一様に捉えるのではなく、「補完的価値」と「独自の価値」という二つの観点から整理する枠組みを提示した。前者は、身体的・経済的・時間的制約を抱える人々に観光機会を提供する点や、旅行前後の予習・復習、疑似体験として機能する点に見られる価値であり、従来の観光体験を拡張する役割を担う。一方、後者は、通常は立ち入ることのできない空間へのアクセス、高精細映像による詳細な観察、さらには仮想空間における新たな体験の創出など、オンラインであることを前提として初めて成立する価値である。本研究は、オンライン観光の発展可能性を、この「独自価値」がどの程度明確に構築されているかという点から検討する点に特徴がある。

分析方法としては、文献調査、事例研究、比較研究の三つを用いた。文献調査では、観光およびオンライン観光の定義や研究動向を整理し、本研究の位置づけを明確にした。その上で、具体的なオンライン観光の事例を取り上げ、提供されている価値の内容と構造を分析した。事例の比較を通じて、オンライン観光がどのような条件のもとで補完的価値にとどまり、またどのような場合に独自価値を形成し得るのかを検討した。

また、本研究ではオンライン観光の多様性を整理するため、分析上の便宜として、その主たる目的に基づき「娯楽観光」と「学習観光」という二つのタイプを設定した。観光行動は本来、娯楽的要素と学習的要素が重層的に交錯するものであり、両者を厳密に切り分けることはできない。しかし本研究では、提供される価値の性質に着目することで、娯乐的価値を主軸とする事例と、教育的・知的価値を主軸とする事例を対比的に分析する枠組みを構築した。この分類を通じて、オンライン観光がリアル観光の延長線上で評価される場合と、オンライン独自の評価軸によって成立する場合との差異を明らかにすることを試みた。

IV オンライン観光の事例分析

本研究では、娯楽観光型オンラインツアー 4 事例、学習観光型オンラインツアー 4 事例の計 8 事例を取り上げ、それぞれについて、概要、内容、参加者の反応、オンライン観光としての意義という観点から分析を行った。

娯楽観光型の事例では、非日常性や没入感、ライブ配信による臨場感、ガイドとの双方向的なコミュニケーションが重視されており、気分転換や疑似的な旅行体験としての価値が確認された。一方で、これらの事例はオフライン観光との連続性が強く、補完的価値に重心が置かれている傾向も見られた。

学習観光型の事例では、美術館や文化資源を題材とし、高精細な映像や詳細な解説、オンラインならではの視点操作を通じて、オフライン観光では得難い深い学習体験が提供されていた。これらの事例では、移動を伴わないこと自体が制約ではなく、むしろ教育的・知的価値を高める要因として機能している点が特徴的であった。

V オンライン観光の発展可能性に関する考察

本研究の事例分析を通じて明らかになったのは、オンライン観光が一様に発展するのではなく、どのような価値を中核に据えて設計されているかによって、その将来性が大きく異なるという点である。すなわち、オンライン観光の発展可能性は、技術水準や市場規模そのものよりも、提供される体験価値の性質に強く規定されている。

まず、娯楽観光のオンラインツアーにおいては、非日常性、癒し、臨場感、体験の共有といった情緒的価値が重視されていることが確認された。これらの価値は、ライブ配信や双方向のコミュニケーションによって一定程度実現されており、参加者にとって気軽に「旅らしさ」を享受できる体験として機能している。しかし同時に、これらの価値はオフライン観光との比較の中で評価されやすく、体験の基準がオフライン観光に依存しやすいという特性を持つ。その結果、オンラインであること自体が価値の源泉となるのではなく、あくまで代替的・補完的な位置づけにとどまりやすい傾向が見られた。

一方で、学習観光のオンラインツアーの事例では、オンラインであることが制約ではなく、むしろ価値を拡張する要因として機能している点が特徴的であった。普段は立ち入ることのできない場所へのアクセス、専門家による詳細な解説、映像技術を用いた視点の操作などは、オフライン観光では実現が難しい体験であり、オンライン特有の教育的・知的価値を形成している。このような価値は、オフライン観光との単純な比較によって優劣が判断されるものではなく、異なる目的と評価軸に基づく体験として成立している。

以上の点から、オンライン観光が持続的に発展するためには、オフライン観光の代替としての完成度を高めることよりも、オンラインであることを前提とした独自の価値をいかに明確化し、利用者に提示できるかが重要であるといえる。とりわけ、学習観光に見られるような価値構造は、オンライン観光が自立的な観光形態として位置づけられる可能性を示しており、今後の市場拡大や社会的受容において重要な方向性を示唆している。

VI 結論

本研究は、オンライン観光の発展可能性について、「価値」という観点から検討することを通じて、オンライン観光が単なるコロナ禍における一時的な代替手段にとどまらない可能性を持つことを明らかにした。文献調査および市場動向の整理からは、オンライン観光が一定の利用者層と市場規模を形成していることが確認されたが、それのみをもって定着や持続性を断定することはできない。本研究は、この点を踏まえ、具体的な事例分析を通じて、オンライン観光がどのような価値を提供しているのかを検証した点に特徴がある。

その結果、オンライン観光の発展可能性は一様ではなく、提供される価値の性質によって異なることが明らかとなった。娯楽観光のオンラインツアーは、情緒的価値を中心とした体験を提供することで一定の需要を獲得しているものの、オフライン観光との連続性が強く、補完的な位置づけにとどまりやすい。一方、学習観光のオンラインツアーは、オンラインであること自体が体験価値を高める構造を持ち、リアル観光とは異なる評価軸のもとで成立

している点において、より高い自立性を有している。

このことから、オンライン観光が今後持続的に発展していくためには、「オフライン観光に近づくこと」を目標とするのではなく、「オンラインでなければ実現できない価値」を中核に据えた体験設計が不可欠であると考えられる。オンライン観光は、すべての観光行為を置き換える存在ではないが、学習や文化理解、包摂性の拡張といった領域において、観光の概念そのものを拡張する役割を担いうる。

以上より、本研究は、オンライン観光を価値構造の観点から整理し、その発展可能性を条件付きで示した点に意義を有する。今後の課題としては、利用者の継続的な参加行動や、オフライン観光との関係性の変化を追跡する実証的研究が求められるが、本研究はその基礎的枠組みを提示するものである。